★統計資料案内★

<不定期刊行物>

資料名	調査年刊行年	発行者
土地，人口		
国勢調査報告（栃木）	35年	総理府統計局
〃（福井）	〃	〃
〃（青森）	〃	〃
〃（和歌山）	〃	〃
〃（岩手）	〃	〃
〃（愛知）	〃	〃
商工		
繊維統計年報	36年	通産大臣官房調査統計部
石炭コークス統計年報	〃	〃
建材統計年報	〃	〃
ゴム塩化ビニール統計年報	〃	〃
窯業統計年報	〃	〃
皮革統計年報	〃	〃
日用品統計年報	〃	〃
工業統計調査（速報）	〃	〃
経済		
通商産業統計年報	37年	通産大臣官房調査統計部
消費者物価指数	35年基準	総理府統計局
四半期別国民所得統計	37年1～3月	経済企画庁経済研究所
特別家計調査報告	36年	総理府統計局
貯蓄動向調査報告	〃	〃
労働		
海外労働情勢	1960年	労働大臣官房労働統計調査部
労働経済の分析	36年	〃
賃金実態総合調査報告	〃	〃
交通，通信		
受信契約数統計要覧	36年	日本放送協会
主要貨物府県別発着トン数	36年	日本国有鉄道
その他		
事業所統計調査報告	35年	総理府統計局
日本標準産業分類適用例集		行政管理庁統計基準局
都道府県別行政投資等実績調査報告	37年	自治省行政局
都道府県		
生産動態統計年報	36年	愛知県統計課
県民所得推計	35年	福島県
大阪府統計年鑑	36年	大阪府
大阪経済の構造	36年	〃
岡山県統計年鑑	35年	岡山県
兵庫県統計書	35年	兵庫県
個人商工業の実態	35年	石川県
福井県統計年鑑	35年	福井県
宮崎県勢要覧	37年	宮崎県
長野県鉱工業生産指数	35年	長野県統計課
島根県 〃	35年	島根県統計課
農家就業動向調査結果	36年	兵庫県文書統計課
宮崎県の工業	35年	宮崎県統計課
神奈川県工業立地条件と工場環境	36年	神奈川県
神奈川県統計書	1960年	神奈川県
学校基本調査結果報告	37年	神奈川県
愛知県鉱工業生産指数	35年	愛知県
学校保険調査結果	36年	神奈川県
愛知県統計年鑑	37年	愛知県
島根県統計書	36年	島根県
県民所得推計	35年	高知県統計課
卒業後のゆくえ	37年	愛知県統計課
県民所得推計報告	35年	岡山県統計課
三重県統計書	35年	三重県
香川県民所得	35年	香川県
福井県工業統計表	35年	福井県
工業統計調査結果	35年	京都府
学校基本調査結果	37年	香川県
県立病院の概要	35年	茨城県保健予防課
業務年報	35年	茨城県農業試験場
茨城県農林水産生産指数	35年	茨城県統計課
事業概要	37年	茨城県農地部
農業協同組合の現況	36年	茨城県農政課
医療施設調査，医師歯科医師，薬剤師調査	36年	茨城県医薬務課
農業基本調査報告	36年	茨城県統計課
茨城県道路現況調書	36年	茨城県道路課
茨城県社会調査報告	36年	茨城県民生部

<定　期　刊　行　物>

資料名	月号	発行者
日本統計月報	9	総理府統計局
消費者物価指数	7	〃
労働力調査報告（速報）	7	〃
内外統計季報	9	〃
小売物価統計調査報告	8	〃
労働力調査報告	8	〃
人口推計月報	7	〃
家計調査報告	5	〃
住民登録人口移動報告季報	1～3	〃
指定統計，調整報告，届出統計時報	9	行政管理庁統計基準局
統計情報	10	〃
通産統計月報	10	通産大臣官房調査統計部
百貨店販売統計月報	8	〃
出荷，在庫統計速報	10	〃
生産統計速報	10	〃
商工統計研究	5	〃
繊維統計速報	9	〃
紙，パルプ統計速報	9	〃
日用品，皮革統計月報	7	〃
ゴム統計月報	7	〃
窯業建材統計月報	7	〃
機械統計月報	8	〃
繊維統計月報	8	〃
商業動態統計速報	8	〃
機械器具流通統計調査結果表	5	〃
労働統計調査月報	9	労働大臣官房労働統計調査部
毎月勤労統計調査報告	7	〃
教育統計	8	文部省調査局
農林水産統計月報	6	農林省農林経済局
鉄道車両等生産動態統計月報	7	運輸省鉄道監督局
都道府県展望	10	全国知事会
広報研究	10	全国広報研究会
農林金融	10	農林中央金庫調査部
調査月報	9	日本産業構造研究所
経済統計月報	9	日本銀行統計局
農業総合研究	10	農林省農業総合研究所
自動車販売実績調	6	自動車工業会

資料名	月号	発行者
統計	8	日本統計協会
国民健康保険事業月報	8	厚生省保険局
北海道統計	4～6	北海道統計協会
統計あおもり	10	青森県統計課
統計いわて	8	岩手県統計協会
みやぎ統計	10	宮城県統計協会
統計秋田	7	秋田県文書統計課
統計春秋	8	福島県統計協会
統計ぐんま	10	群馬県統計協会
統計月報	9	埼玉県統計協会
統計千葉	9	千葉県統計協会
東京小売物価動向	8	東京商工会議所
東京卸売物価動向	8	〃
東京都家計調査報告	8	東京都
神奈川の統計	10	神奈川県統計協会
交流	9	山梨県
静岡県の統計	8	静岡県統計課
統計にいがた	8	新潟県統計課
統苑	9	岐阜県統計課
統計月報	10	愛知県統計課
大阪の統計	8	大阪府統計課
兵庫の統計	8	兵庫県統計協会
統計月報	9	鳥取県
島根の統計	10	島根県統計協会
統計の泉	9	広島県統計協会
香川統計だより	7	香川県
えひめの統計	10	愛媛県統計協会
統計福岡	10	福岡県統計課
統計佐賀	9	佐賀県統計課
統計月報	8	長崎県統計課
大分の統計	8	大分県統計協会
統計宮崎	7	宮崎県統計課
統計鹿児島	10	鹿児島県統計協会
農業茨城	8	茨城県農業技術研究会
茨城県主要経済指標	9	日本銀行水戸事務所
専売統計月報	8	日本専売公社水戸地方局
茨城県気象月報	7	水戸地方気象台

経済スポット

経済の高度成長と農業問題 (1)

前号に引続いてあと少し経済成長と農業問題ということについて触れてみましよう。イギリスのピグーという経済学者が，その著書のなかで，国民の福祉を高めるには三つの基本的な条件が満たされなければならないとしております。つまり，

1　国民所得を多くすること。

2　国民所得の分配が公平であること。

3　国民所得があまり変動しないで安定化すること。

こうした三つの条件が関連性を保ちながら，充足させることが国の経済政策なり，経済計画の基本的な要素となるというのです。

従来から，わが国の経済構造の大きな特質は二重構造にあるといわれております。すなわち，非資本主義的な産業部門と，資本主義的な産業部門が並存してその産業部門間の生産性格差がいちじるしいということです。

しかし，国民の福祉の向上と，産業の長期的発展という指標のまえに二重構造の是正は現実的な問題として要請されております。そして，政府の「所得倍増計画」の中でも将来における高度経済成長が，はじめてその是正の現実的条件を醸成するものとしております。しかしながら，こうした経済の高度成長というものがかえつて二重構造というものを激化させると批判する人もあります。このことは，過去の経済の高度成長というものが，二重構造を足がかりとしてきましたので，これからさきもそれを土台に発展するというわけです。

ここで，戦前の日本経済を考えてみますと，低賃金や低米価によつて農民や労働者の所得は相対的にいつも低く押えられて，国内市場は非常にせばめられておりました。そこで，このような貧弱な国内市場を補うために低賃金によるところの輸出ドライブという形で海外市場をつくり出したわけです。また，民間需要の貧弱さは政府需要なりあるいは軍事需要なりで，つねに支えられておつたわけです。そして，高い生産を維持しながら，変動に対する調節作用は，もつぱら価格面で行なわれました。商品や賃金の価格を切り下げるほうが，生産を低下させるロスよりも小さいという圧力が戦前の経済にはたえず働きつづけておつたのでしよう。

このように物価や賃金を可能にしたのは，いうまでもなく日本経済に潜められた二重構造にもとづくものであります。かかる二重構造が世界に比類のない高度経済成長を生んだということになるわけです。戦前の高率の小作料，農業から生み出された資本の工業への投下，人口のたえざる増加は戦前の日本経済における二重構造の解消をさまたげた大きな要因ということができましよう。ここで，考えなければならないことは，わが国の経済を世界経済の進展に対応しながら先進諸国の水準に近づけるには，どうしても産業構造の変革が必要であるわけです。いいかえれば，従来の二重構造を土台にして，それを推進していくようではどうしても高度の経済成長は望めないということです。

このような傾向は地域別にみた場合とくに顕著な現象としてあらわれております。と同時に県際間の地域差は想像以上の大きな波動となり，先進経済圏と後進経済圏の大きな地域差としてあらわれております。

すなわち，本県の昭和35年の1人当り分配所得は96.1千円で国民1人当り123千円を100とする格差は78.3%でありますが，これを東京都の227千円（185%）にくらべると大きなひらきがあるわけです。

ということは，茨城県にのみ言えることではなく，全国の後進県といわれる地域の一連の姿と言えるでしよう。そしてこの解消のためにその地域の経済力を推進し産業構造の変革をねらつてそれらの多くの県において地域開発計画が真剣にとり上げられ，工場誘置に奔走するのも必然的な成りゆきとみられます。しかし，土地の造成に，道路の整備に，あるいは新工場の誘置等にこの計画のなかには大くの難事を包蔵しております。と同時にこの計画を進めていくうえに最も大切なことはその地域の経済実態を充分把握することにあるでしよう。

ここで本県の場合について考察してみましよう。

第一に産業構造でありますが，（第1表）を参考までにみてみますと（次頁第1表参照）をみても分りますように，国と比較してみますと第1次産業の本県の構成比31.5%は，国の15.6%に対しちようど2倍になつております。

また，第2次産業においては約10%，第3次産業においては約7%それぞれ全国平均より構成比が下まわつております。また，この表からみても分りますように本県における第1次産業の比率が年々低下の傾向にあり，反対に第2次産業がその比率を高めつつあるにかかわらずなお本県の生産所得が農林水産業に多くを依存していることがわかります。

次に第1表右欄の「国民一人当り分配所得に対する県民一人当り分配所得の格差」をみますと，この格差の接近した県は相互に近似した産業構成を有するということ

（第 1 表）　　産 業 構 造 比 較 表

	昭和34年			昭和35年			34年における国民所得との格差
	第1次産業	第2次産業	第3次産業	第1次産業	第2次産業	第3次産業	
	%	%	%	%	%	%	
全国	**17.1**	**34.0**	**49.3**	**15.6**	**37.2**	**47.6**	—
神奈川	4.3	49.0	46.7	4.0	54.4	41.6	3
群馬	28.7	26.0	45.3	27.1	29.0	43.9	29
茨城	33.8	24.9	41.3	31.5	27.6	40.9	30
鹿児島	36.6	14.2	49.1	35.7	14.7	49.3	45

次に第３次産業は各都府県ともあまり大きな差はなく，産業構成の差異は主として第１次産業と第２次産業の優劣にかかつていると考えられます。本表は上位にある神奈川と下位の鹿児島県を引例して掲示しました。

つぎにこのことを就業者構成の上からみますと興味深いものがあります。第２表から，第１次産業についてみますと全国平均の就業者構成は32.8％であるのに対し，北関東地区の49.1％，南関東14.4％で両者間に大きな差がみられます。つまり，北関東地区について言えることは，全就業の約50％が第１次産業に従事しているという農業圏の形態をとつております。これを，さらに本県の産業にあてはてめみると，第１次産業が56.2％，第２次産業が16.8％，第３次産業が27.0％で全国平均にくらべて第１次産業で23.4％，第２次産業で12.4％，第３次産業で11％と大きなひらきが分ります。また，これを南関東地区についてくらべてみると第１次産業で41.8％，第２次産業で21.1％，第３次産業で20.7％とその格差はますます大きくなります。

このことは，非農林漁業就業者（第２次産業，第３次産業）の少いことを物語るものであり，本県の昭和35年における非農林漁業就業者は総体の43.8％で全国及び南関東にくらべ23.4％及び41.8％も少いことがわかります。（以下次号）　　経済統計係長　横須賀弘

（第 2 表）　産業別 地区別 就 業 者 構 成 比 較 表

年次および産業別 ＼ 県名	昭和25年			昭和30年			昭和35年		
	第1次産業	第2次産業	第3次産業	第1次産業	第2次産業	第3次産業	第1次産業	第2次産業	第3次産業
	%	%	%	%	%	%	%	%	%
全国	**48.3**	**21.9**	**29.8**	**41.0**	**23.5**	**35.5**	**32.8**	**29.1**	**38.0**
茨城	69.9	11.4	18.7	63.9	12.5	23.6	56.4	17.3	26.3
栃木	58.6	18.0	23.4	53.1	18.2	28.7	45.7	23.7	30.6
群馬	56.5	20.0	23.5	51.1	21.8	27.1	42.8	26.8	30.4
北関東	62.6	15.9	21.5	56.8	17.0	26.2	49.1	22.1	28.8
埼玉	54.2	19.4	26.4	45.5	24.2	30.3	35.6	30.6	33.8
千葉	63.2	12.0	24.8	55.7	14.1	30.2	47.4	19.3	33.3
東京	6.4	37.1	56.5	3.8	38.2	53.0	2.2	42.7	55.1
神奈川	22.3	30.5	47.2	15.5	31.6	52.9	10.3	42.7	47.0
南関東	28.3	28.1	42.6	20.4	31.1	48.5	14.4	37.9	47.7
静岡	50.0	23.0	27.0	39.4	27.9	32.7	30.7	33.6	35.7
愛知	35.6	32.0	32.4	26.9	36.8	36.3	18.7	44.6	36.7
三重	54.5	20.6	24.9	48.5	22.7	28.8	42.1	26.2	31.7
東海	44.3	26.6	29.1	35.1	31.2	53.7	26.6	37.9	35.5

企業と統計

茨城県経営者協会の巻

数年来高度成長をとげてきたわが国経済も昨秋頃より国際収支の悪化の兆候と景気調整政策の進行，また予想よりはるかに早められつつある貿易自由化は，わが国企業経営を一大波浪にさらしている。日新月歩の技術革新は次々と新しい製品を生み出し，新しい製造過程をあみだしている。また，産業構造の高度化，消費市場の変化等の企業経営をとりまく内外の環境変化は，ある時は設備の巨大化，精密化，自動化，そしてコンビナートを，またある時は年功序列体系（人事，賃金等）への反省，資本構成の是正，マーケッテング戦略等の動きとして，企業経営にめまぐるしい変化をうながしている。

このような中にあつて企業経営の最大の目標は内外からのプレシヤーをいかに克服し，企業競争にうち勝つことであり，企業収益の確保である。従つて労務管理の上にも大きな影響を与えずにはおかない。もはや小手先の器用さだけではどうにもならない，今や，長期的な見通しに立つた対策が必要であり，企業経営の存亡かけ，経営の改善合理化の課題を一段と強く実践的に追求しなければならない時である。

このような時，企業経営にあたつては，みずからの企業の実態は勿論のこと，同業他社や産業界の実情，さらに国民経済全体の動向を適確に把握することが極めて必要になつてくる。

労使間の問題にあつても，問題となつている事実を正確に把握することがそれを合理的に解決するための第一歩である。経協の調査活動は，労使間の問題で最も多くの部分を占められている労働条件特に賃金をめぐる諸問題（初任給，昇給，賃上げ，夏季冬季の賞与一時金，退職金等）を中心として，全員会社を対象に調査をし，結果をまとめ報告書を配布している。

さらに官庁や専門的調査研究機関の調査資料は勿論，民間の諸資料をも利用し易いように作成し，会員会社に提供している。

昭和37年度の計画は次のようなものである。

皆さまのところの調査資料との交換をぜひお願いします。

調査活動計画

(1) 調査の整備充実

定期調査

1 賃金事情調査 （年1回）
2 初任給調査 （年1回）
3 退職金事情調査 （3年1回）
4 労働時間，休日，休暇等労働条件の実態調査 （3年1回）
5 職種，年令，学歴，勤続年数，扶養家族数別モデル賃金調査 （2年1回）
6 臨時工実態調査 （3年1回）
7 賃上げ，賞与要求妥結状況調査 （年3回）
8 諸給与手当の実態調査 （年1回）

臨時調査

1 業種別経営調査及び基本職種の労働条件調査
2 企業内教育訓練の実態調査
3 福利厚生の実態調査
4 諸規定調査
5 その他

(2) 資料蒐集及び図書整備とその配布

1 「経営関係諸規定類」の蒐集整備
2 経営関係図書資料類の整備
3 「経営分析」「経営統計」資料の整備と普及
4 「賃金資料」の充実
5 企業内教育に関する資料の蒐集
6 各種資料の作成

(3) 広報資料活動

1 「経営講座」「監督者講座」関係速記資料の整備と配布
2 「経協速報」の作成配布

グラフにみる

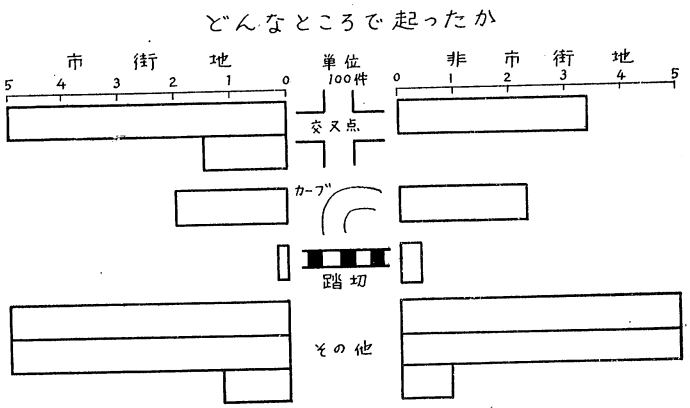
交　通　事　故

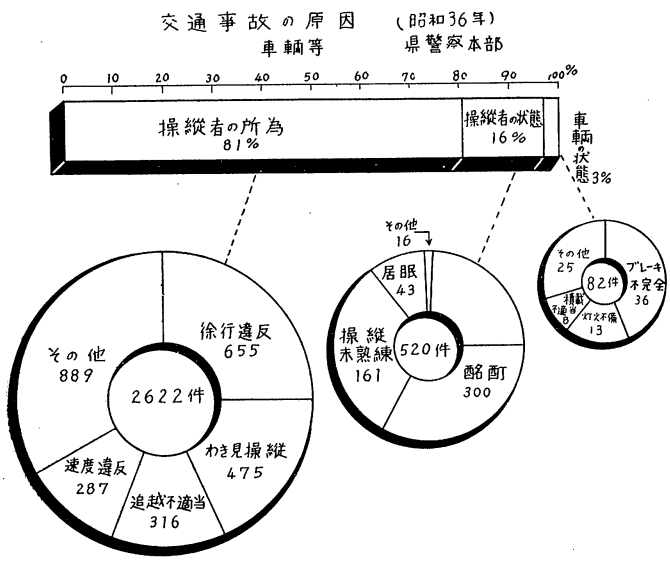
からすの鳴かない日はあつても，交通事故が起らない日はないというほど，毎日頻繁に交通事故が各所で発生している。新聞の三面記事も交通事故のことでいつぱいそれに最近の事故は大型のものが多く，ために犠牲者も少くない。このような交通事故による惨事を無くすうえにも，もう一度交通事故の統計を見直し事故原因をつきとめてみよう。

昭和36年の本県交通事故発生件数は 3,707件で前年の3,412件にくらべ8.6%の増加であり，1日約10件の交通事故が発生していることになる。事故による犠牲者は※死者226人，傷者3,850人で，年令別では20才～24才が最も多く 636人となつている。ではこのように多くの犠牲者を出した事故はどうして起つたかというと，その多くは車によるもので，3,224件を数え，その原因はグラフにみるように，操縦者の所為がほとんどで，特に徐行違反，わき見運転が多い，これは事故の多くが交叉点で起つていることと合せ考えればうなずけるところであり，通勤をしていても電車が停車しようとしているのに，すごいスピートでとばしている自動車には，まつたくひやひやさせられる。また交叉点でも，信号が黄色になつているのに目もくれず，走つて行くダンプカーには困つたというほかない。

操縦者の状態ではそのほとんどが，酩酊とあつては考えさせられてしまう。交通法規も従来よりは厳重になつて，厳罰主義でその取締にあたつているようですが，それでもこんなによつぱらい運転による事故が多くては，安心して道路を歩るくことも出来ない。

操縦未熟練が161件，無免許運転の327件などはまつたく危険千万なことである，ことに事故を起した運転手の運転経験年数をみると，3年未満がそのほとんどで，これからは試験制度の検討も必要ではなかろうか，車の状態でブレーキ不完全が多いのも，気違に刃物という感じがする，車を持つている人はせめて車の整備ぐらいは良くやつてもらいたいものである。そして悲しい事故が起らないよういつも心がけてもらいたい，と同時に歩行者もまた最善の注意を怠らず，お互に事故をなくすよう努力すべきでしよう。（生井）





統計図表展今日ある記

結城市役所　宮　田　良　二

結城市で（当時町であつたが）統計図表展を最初に初めたのが昭和28年であつた。当時の県の調査課長が村田真道氏で，非常に熱意のある人で県内で何市町村かを選んで統計のモデル市町村を選定した。結城町もそのモデル市町村の一つとして選ばれたわけであるが，事業として県で募集した図表の展覧会を結城でやることになつた。そこで私達で相談して折角ここで展覧会をやつていただくのなら，町内の小中学校にも相談して作品を募集して一諸に展覧会をやつたらどうだろうかということになり，早速学校に連絡し図表を書いてもらうことにした。さていよいよ展覧会であるがなにしろ初めてのことでどのようにしてやつたら良いかさつぱりわからない。とりあえず小学校の講堂でやることにして学校に相談に行つたら，学校でも丁度今年から子供美術展をやるようになつたので材料は学校でもつから，大工の手間は役場でもつてくれということになり，この問題は割に簡単にきまりついたが，実際に準備にかかつてみるとなかなか大変であつた。当時の写真がいまもあるが現在と比べて今昔の感が深い。小中学校から応募された作品も二・三十点で内容もごくおそまつであつた。私自身も書いて見たが今見ると小学生が書いたような図表である。

このような事で何んとか第１回の展覧会が終つたのであるが，翌年は町村合併で１町４村が合併したので小中学校も２校から一躍11校になつてしまつた。しかしまだモデル市町村には指定されているし１回だけでやめるのもどうかと思つたので今年も募集することになつた。

その結果は６校が参加するに止まつたが最初のこころみとしては仕方のないことかも知れない。このころは私達も先生方も夢中であつたし，どのように統計図表を書いたら良いのか皆目わからなかつたこともあるが，提出された図表がすべて参考書をまる写しにしたような作品ばかりであつた。例えば「世界の貿易」だとか，「世界の石炭の産額」とかといつたような資料ばかりで，自分達で調査したとか，自分達の身の廻りの身近かな資料といつたものは数少なかつた。私達は県の統計展やその他の参考資料を見てこれではいつまでも発展しない，なんとかしなければと思い，それまで自由だつた資料に制限を設け，課題にマツチした作品のみ審査の対象とした。又数多く出品してもらうように学校１枚づつだつた募集要項を先生方１人１人に渡るように印刷して配布した。回を重ねるごとに作品も多くなり優秀な作品も多くなつたが，余計な心配が一つふえてきた。学校同志の競争もはげしくなり，先生方あるいは父兄の関心も相当にあるためであろうか，先生の手が入つつた作品が見えてきた。審査の段階で一番なやます問題はこの指導の手がどの程度作品にはいつているかである。あまりきびしくすると入選に該当するような作品が全然なくなつてしまつたりするので困つてしまつた。そこで審査の際学校から１人づつ立会つていただき，明らかに手の入つている作品を除いてもらつた。しかしこのようにしても展覧会の席上で「この図表は○○先生が書いていた」などと子供達が言つているのをきくといささか無量の感がする。この問題について後日統計局の小野先生から聞いたことがあるが，全国の統計展でもいつもこの問題が出るが，大体５割程度まで手が入つているのは仕方なく通しているそうである。それからは募集する前に学校の先生方に集まつていただき，種々問題点について話合うことにした。このことは非常に有益な結果をうみ，前記の問題や，学校の教材との関係，（例えば小学校の低学年は円形グラフは教材として出てこない），又低学年においてポスターカラーを使用する傾向があらわれたが，費用の点において又使用上においても考えさせられるので，一応低学年

においてのポスターカラーの使用を認めないことにした等のことについて話し合つた。

結城市の統計図表展も回を重ねて今年で丁度10回，最近はようやく県の水準に達し今年は全国のコンクールにおいて1席に選ばれたが，10年をかえり見て良くここまで到達したものとうたた感無量なるものがある。まず10年の間1年の休みもなく定期的に毎年開催したのが良かつたものと思う。最初の頃は応募点数も少く，内容も幼稚であつたが，回を重ねるごとに内容も充実し，最近では展覧するのに骨が折れる程出品点数も多くなつてきた。これひとえに学校の先生方の指導のたまものと，深く感謝している次第である。

去年から応募作品と参考作品を各学校毎に展示するようにした。それまでは1カ所に展示したが，それでは距離的にはなれた学校ではなかなか見にこられないのが実情であるが，自分達の学校に展示されればいきおい目に入るので，とても良い結果を生んだと信じている。また全国コンクールの入選作品のカラースライドも購入して各学校に貸出しを行つたが，これも構図において，色彩において非常に参考になつたことと思う。

統計図表が書けば書く程むずかしいものとづくづく考えさせられる今日このごろであるが，統計係として十有余年なんらの足跡も残すことは出来なかつたが，唯一つ統計図表だけは他に負けないぞとがんばつている次第である。

日本の広告費

私達現代人は1日として広告から逃れることはできませんが，この広告に用する費用はどのくらいになつているのだろうか。株式会社電通調べによれば，昭和36年度の日本の広告費総額は2,110億円で35年度の1,740億円の21.3%増であり，国民所得の1.5%にあたる。I・A・A発表による世界28カ国の広告費総額は，およそ5兆7,500億円であり，第1位のアメリカは日本の国家予算の倍以上にあたる4兆2,000億円で国民所得の2.8%。第2位は金額はぐつと少なくなり4,600億円，国民所得の2.2%に相当する。そして日本は第5位，また国民1人当りではアメリカがトツプで23,464円次がカナダの11,363円，日本は15位で1,857円となつている。

媒体別広告費とその構成比は，新聞は824億円で39.1%雑誌は125億円で5.9%，ラジオは178億円で8.4%，テレビは539億円で25.5%，D・Mは90億円で4.3%，屋外その他は321億円15.2%，輸出広告費は33億円で1.6%となつている。

媒体別に広告費の推移をみると，ここ2，3年の間にぐんぐん伸びてきたのがテレビで32年度には60億円であつたものが，5年後には539億円と5年間に9倍になつた。ラジオは減少こそしないが，32年の150億円からほとんど伸び悩んでいる。新聞は30年頃から毎年100億円ぐらい増加している。

業種別広告費は新聞，雑誌，ラジオ，テレビの4媒体によつたものであるが，機械器具で331億円，内訳は新聞120億円，雑誌30億円，ラジオ32億円，テレビ148億円となつており，そのほとんどが新聞とテレビになつている。第2位は食料嗜好品で226億円，第3位薬品医療品201億円，以下化粧品，雑品，金融，保険等の順になつている。業種によつて利用媒体が異なつており，出版，百貨店，興業などは広告費の90%までが新聞で，その他の業種は新聞とテレビを多く使つている。また業種別の広告費の推移をみると，増加率が激しい業種は，機械器具食料嗜好品，薬品医療品，化粧品，雑品で，ゆるやかな増加をしているものとして百貨店，出版，金融，保険，衣料品繊維があり，横ばい状態にあるのが興行，交通運輸であります。

新聞，雑誌，ラジオ，テレビの広告費の地域別投下額とその割合をみると，関東および静岡が598億円で38.5%，近畿が307億円で19.7%，その他の地域はぐつと低くなつている。

以上みてきたように出ている広告もさることながら，それに要する費用も馬鹿にならない，これだけ商品を安くすればと消費者は考えるが，メーカーとしては厳しい競争の中でそのようなことはとても出来まい，そこで同じ広告でも，見るもの聞くものに好感をあたえる品のよいものを出してもらいたいものだ。

市町村の横顔

美和村

1 概況

高野村長

水戸から茨城交通のバスに乗つて大宮へ，大宮で烏山行のバスに乗りかえ，こんどは山合を縫うようにものすごいほこりをあげて走つて行く山奥に入るにしたがつて，まだ紅葉には早いが周囲の山々の緑は，澄みきつた青空にはえて美しい。2時間程でバスは役場前に停車する。この村の交通機関はこのバスのみで，それというのも，国鉄水郡線玉川村駅からは17粁，国鉄烏山駅からは16粁という地理的条件にあるからだ。

昔この村は，常陸国朝妻郷として佐竹氏の所領であつたが，徳川幕府となり代々水戸藩の領するところとなり廃藩置県の際，水戸県に属し，明治4年7月14日茨城県となつた。戦後町村合併促進法が制定され，昭和31年9月26日に，旧檜沢村と旧鹿郷村とが合併して，美和村が誕生した。

昭和35年の国勢調査による人口は8,364人で，そのうち4,130人は就業人口であり，就業人口の内訳をみると，第1次産業に従事する者は，2,814人で68%を占めており，そのほとんどは農林業に従事している。また1960年の農林業センサスによる林野率は85%で，このようなことからみてくると，この村は農業と林業を中心とした村であるといえる。

2 産業

総面積の85%が林野であるということをみても，いかにこの村における林業の占めるウエイトが大きいかがうかがわれる。林野面積は6728haで，良質の檜，杉，松などを産し，その生産量は素材として26,472m³，薪炭材として3,812層積m³であり，これは2位の山方町3,098m³を大きくひきはなし郡内トツプの生産量である。村内には16の製材所があり，山から切り出された素材を，次々と処理している。

米の生産量は480tで，これではこの村の消費量の半分たらずであり，米に関しては消費者側であるようだ。

農作物は米麦のほか主な収入源として，たばことこんにやくいもがある。たばこは1ha当り6～7万円にもなり，そのため栽培農家も610戸にのぼり，114haが作付けされている。また，こんにやくいもはたばこより収入歩合がよく1ha当り10万円近くになる。一年間に村全体の売上金は 700万円におよび，出荷先は群馬県下仁田方面で，出荷にあたつては村当局としても，いろいろと面倒をみている。

最近では働き手の不足から，たばこのように手間のかるか農作物は敬遠されがちで，これにかわつて食肉用牛や乳牛の飼育が盛んに行なわれており，村としてもこれらの導入については，補助金を支出して酪農経営の育成を図つている。

山奥のために交通通信には恵まれていないが，これを補うため村営の有線放送が全村に普及しており，1,240世帯が加入している，役場や農協からのお知らせや野菜の出荷時期には，その日の相場を知らせて出荷の便を図るなどその利用範囲は広い。

3 教育文化

小学校は7校で児童数1,384人，中学校は2校生徒数791人である。現在県下の市町村では統合中学校の建設を推進しているが，この村では地理的に他とは違つた条件であるので，統合中学校は建設しないとのことである。

交通に恵まれないため文化の恩恵を受ける機会も少ないであろう，それだけにこの地域における社会教育活動の意味するところは大きい。村の教育委員会では，1公民館活動の強化，2社会教育指導者の育成，3青少年教育の充実，4成人教育の推進，5新生活運動の促進の5項目を努力目標として社会教育活動を推進している。とくにこのうちの3については力を入れており，年1回日光方面へのキャンプ研修なども行なつている。また，公民館活動も盛んで，公民館には8mm撮影機，映写機，テープレコーダー，ステレオなどがあり，これらを利用して各種の活動が強力に推進されている。

写真の三浦杉は，近衛天皇久寿2年相模国の住民三浦大介基安勅命により那須野の悪狐を退治に行つた帰りに吉田八幡神社に参詣し，社前に杉を植え祝して曰く我冥護により能く武運を果し心願を成就せばこの杉天に聳えよといわれた，後世その言葉のとおり，この杉は周囲10m，枝下29m，総樹高59mという日本でも屈指の巨杉となり，昭和8年天然記念物として指定された。

最後に山里にある閑静なこの村が益々発展されることを願つて紹介にかえたい。

人　間　雑　話 (6)

茨城大学教授　塚　本　勝　義

彼岸になつたので，夏目漱石の〔彼岸過迄〕を思い出した。〔彼岸過迄〕は明治四十五年の一月から四月にわたつて朝日新聞に連載された名作だ。彼岸過迄書くのでこんな題をつけたのだつた。漱石の頭は病的と評したいほど緻密なのだが，作品の題名は無造作につけた。漱石にとつては題名なんかより作品の中味が大切だつたからだ。レツテルはどうでもかまわぬ。他の作品と区別がつけばいい。どこまでも中味本位に，品質第一で仕事したのが漱石だつた。現代人は題目に苦心して中味をぞんざいにするきらいがある。これは漱石とは逆な行き方だ。

○　○　○　○

〔彼岸過迄〕の中心人物須永市蔵は軍人の息子。現在は母と二人でひそやかに暮している。彼は，見ないで考える男だ。考え過ぎて行きづまる。その考え方は，先へひろがらないで，内側へ内側へと，とぐろをまいて深くなつて行く。考えるというよりも〔疑う〕と言つた方があたつている。

実は，須永は現在〔母〕と呼んでいる女性の子ではない。父と女中お弓の間に生まれた子なんだ。長いこと知らないでいた。父が臨終のとき，〔お母さんの世話になるんだよ〕といつた。すると母は〔お母さんがいるから心配しないで〕といつた。この二つの言葉に簡単でない背景のひそんでいることを感じとつた須永は，その日から憂うつになつた。疑いをそのままにおけず叔父の松本を責めて，とうとう自分が女中の腹から生まれた事実を明らかにした。

すると彼は，いわゆる母の顔がまともに見られなくなつた。母の苦しい胸中をくわしく考えた結果である。考えれば考えるほど苦しくつて，ついにいたたまれず，旅行に出かけてしまつた。

○　○　○　○

須永には，千代子という〔いいなずけ〕があつた。千代子とは〔いとこ〕だ。千代子は明朗で，のびのびした美しい娘だ。

ところで須永は考える。千代子さんは，どこから見ても女らしい女である。活力があつて，恐ろしいということを知らない。恐ろしいことを知らぬから，風のごとく自由に生きられる。自分は，恐れてばかりいる男だ。恐れているから何事もできない。必然的に愚図の標本のような男だ。こんな自分と，全く反対の性格である千代子さんと結婚してみたところで，好い夫婦のでき上がるはずはない。それどころか，あの明朗な千代子さんを不幸のどん底にたたき込むことは判り切つている。絶対に結婚すべきではない，と考え込んでしまつた。

○　○　○　○

結婚のあたりはずればかりは，一緒になつてみなければ見当つかない。お互に幸福間違いなしと予想した結婚が，またたく間に分裂し，押しつけられて，やむを得ずに結婚した二人が一生むつまじく暮す場合だつてざらにある。然るに須永は，こんな事実を見ようとはしない。自分を考え，千代子を考え，矛盾する点ばかりを，くわしく探りつづける。そして，くわしく考えることによつて，二人の間に，作らないでもいい壁をわざわざ作つて行く。

○　○　○　○

けれども人間は，考える通りには生きられない。考えの及ばない力にゆさぶられる。

ある夏，須永は千代子らと鎌倉の海に遊んだ。このとき千代子は高木という青年と一緒にボートに乗つた。それを眺めた須永は，じつとしておられない。ボートからとびおり，一直線に東京に帰つてしまつた。驚いたのは千代子だ。青くなつて須永のあとを追つた。途中で，大急ぎに島田に髪を結んでから須永の家にねじ込んだ。

〔あなたは卑怯です〕と叫んだ。本当にわたしと結婚する気がないなら，なぜこんなツラアテがましいことをするんですか——という怒りの言葉であり，同時に，わたしには〔あなた以外に結婚する相手はありません〕という宣言でもあつたわけだ。

○　○　○　○

結婚しないというのは考えだけなんだ。考えの届かぬ須永の心情の世界には，千代子を深く愛する情熱がうごめいていた。さればこそ嫉妬して東京まで駆けてきた。千代子を愛していたからこそ性格の比較をしていたともいえよう。愛があるから考える対象になつていたんだ。結婚否定は理屈，愛情こそ本音だつた。

○　○　○　○

須永だけではない。われわれもまた自覚する自己と自覚せざる自己とを持つている。両者が一致すれば無難だが，くい違うと，意外な悲劇も起りかねない。